

平成 25 年度「学生論文賞」第 2 次審査論文

# 大学生のサークル集団における 先輩への信頼感と強制感の関係について

小樽商科大学商学部企業法学科 4 年  
学籍番号 2009337 長崎滉介

## 目次

はじめに	p.3
第1章 問題と目的	p.4
1-1 サークル集団の重要性	
1-2 離職率とサークル集団内の先輩後輩関係	
1-3 サークル集団の特徴、及び集団フォーマル性の定義	
1-4 サークル集団内における青年の対先輩行動に関する研究	
第2章 本研究の仮説と分析、そして結果	p.7
2-1 仮説	
2-2 分析、そして結果	
第3章 考察	p.12
3-1 考察	
3-2 まとめ	
引用・参考文献	p.14
質問紙	p.15

はじめに

社会に生きている人間は皆、何かしらの集団に属して生きている。例えば、学校、会社、部活など、人は人の集まり、集団の中で生きている。その集団に加わる時に人は“新人”として加わることが多い。そして、その集団に長く居る中で人は“新人”から“先輩”へととなっていく。

人が先輩となった時に不可欠なのが“後輩”と接することである。そして後輩との接し方は、ただ単に接すれば良いというわけではなく、自分がその後輩にとってのより良い先輩となり、先輩—後輩間の人間関係を密なものとし、属する集団をより良く発展させていくことが求められる。

だが、先輩—後輩間の人間関係を密なものにしようと、後輩に対して“甘い顔”ばかりできるものではない。先輩としての自分、また後輩も属する集団がある以上、その集団のためにしなければならない、ある種の義務のような雑務が存在し、先輩として後輩にそういった雑務をやらせなければならない時もある。そういった時に後輩は強制感をどれだけ抱くのか、そしてその強制感は先輩への信頼感にどれほど影響を与えるのか。このことを調査することは、この先どのような集団に属することがあっても、先輩となる可能性が人間誰しもあることから重要であると私は考えた。

そしてそういった集団の中でも特に、金銭という利益の追求を目的としていないという点でアルバイト集団等と大きく異なるサークル集団に本研究では焦点を当てる。新井・松井(2004)は、サークル集団は所属する成員に技術の向上の機会を与えるだけではなく、サークル集団で得られる友人関係や先輩後輩関係によって対人关系的な機能も果たしており、サークル集団は大学生の学生生活の充実感に時として学業以上に大きな役割を果たすと指摘している。故に、本研究のテーマであるサークル集団内の先輩後輩関係の強制感—信頼感がどのような関係にあるのか明らかにすることは、大学生の学生生活の充実感向上に寄与する重要な事柄である。

また、昨今社会問題となっている大学新卒者の離職率に関する問題の要因も、このサークル集団にあると推定できる。

本研究の調査にご協力いただきました学生の方々に、心よりお礼申し上げます。また、ご指導と貴重なご指摘をいただきました先生方に感謝申し上げます。

## 第1章 問題と目的

本研究は大学生のサークル集団内において現代の青年が上からの強制感を抱いた時に、先輩への信頼感はどのように変化するのかを、所属するサークル集団を集団フォーマル性の高低、すなわち規律性の高い集団か否かで分類し検討することを目的とする。また本研究では、「クラブ」「サークル」「部活動」などの集団を特に区別せず、「サークル集団」という語を用いる。

### 1-1 サークル集団の重要性

サークル集団は、大学生が日常的に接する集団の中で、自由に加入・脱退することができ、企業に比べて規律性の低い集団であると言える。しかし、大学生の約半数はサークル集団に所属しており(1995年 49.8% 2000年 40.8% 内閣府政策統括官(総合企画調整担当)、2001年)、また、学生達は学園生活のうち授業以外の時間をサークル集団の活動に費やしている。このような現状から、サークル集団は大学生にとって日常的に密接に関わっている集団であることがわかる。

このようなサークル集団における先輩後輩関係は、大学生にとって大きな役割を果たしている。松井(1996)は青年期の友人関係が持つ機能として以下の3つを挙げている。

1 つめは「安定化」である。これは、青年にとって友人は自分が抱えた悩みを聴き、相談にのってくれる相手となる、ということである。

2 つめは「社会的スキルの学習」である。これは、家族以外の他人とどのように接するべきか、というコミュニケーションの方法を学ぶことである。

3 つめは「モデル機能」である。これは、親しい相手であるだけでなく、自分にはない資質をもち、尊敬し憧れる存在でもある友人の行動や考え方を自分の生き方の手本とすることである。これらの機能のうち「社会的スキルの学習」や「モデル機能」は同年代の友人関係よりも、サークル集団への所属期間が長く、人生経験の豊富な先輩に対しての関係において強く発揮されると推定できる。

また宮下(1995)は青年にとっての先輩後輩関係の意義として以下の2つを挙げている。

1 つめは、ある目標をみんなで共有し、リーダーの下で協力してその目標を育むことである。これはサークル集団内の先輩後輩関係ではなく、同年代の友人の集団でも考えられることであるが、より社会の実態に近いかたち、つまり職場集団などに近いかたちで取り組むことができるのである。各々がもっている考えを話し合い、先輩・後輩といった立場の違う人の意見に耳を傾けて結論を出していく。このようなかたちで共有した目標を育んでいくことは、同年代の友人の集団よりもサークル集団内で顕著に見られることだと考えられ、青年にとってはこのプロセスの中で自己の価値観や信念を明確にすることができるのである。

2 つめは、社会性の獲得である。これはサークル集団での活動を通じて、リーダーや先輩への礼儀と尊敬の態度、後輩への労わりの心、上下関係の中で自分の役割を遂行する力などの社会性を得ることができる、ということである。このような社会性は青年が将来、企業などの組織で活躍するのに必要な能力であると考えられることができる。

## 1-2 離職率とサークル集団内の先輩後輩関係

これまで青年にとって、サークル集団内での先輩後輩関係はより青年期における友人関係がもつ機能である「社会スキルの学習」や「モデル機能」を強く果たすこと、そして青年にとってサークル集団内の先輩後輩関係がどのような意義をもっているのかについて述べた。サークル集団内における先輩後輩関係のこれらの機能、意義は昨今社会問題となっている大学新卒者の離職率の高さに関係していると推定される。近年、大学新卒者の離職率は3年間で25%とも言われており、離職理由としては就職活動時に抱いていた企業のイメージと入社後の企業の実情とのギャップ、低賃金、企業の国際的競争に伴う労働内容の激化など様々な理由があることが考えられる。また、独立行政法人労働政策研究・研修機構の報告(2007)で、離職理由として職場の人間関係を挙げた人は27%、職場での先輩との人間関係が良好でなかったと回答した人は38.2%に及んでいると指摘していることを踏まえると、職場での先輩との人間関係の不和が大学新卒者の離職率を上げる大きな要因になっていると考えることができる。

青年にとってサークル集団内での先輩後輩関係は他者とのコミュニケーションの方法を学び、先輩への礼儀と尊敬の態度という社会性を獲得することのできる対人関係であるにも関わらず、職場ではこれらの獲得したスキルを発揮できずにいる。これは、サークル集団内での先輩後輩関係がもたらす機能、意義が指摘されたのが松井(1996)、宮下(1995)といずれも10年以上過去のことであるからして、時代の移り変わりとともにサークル集団内での先輩後輩関係、さらに言えば青年がもつサークル集団内の先輩との対人関係が変容したのだと推定することができる。また、この問題から職場で先輩との人間関係に不和があるということは、先輩との間に信頼関係が築けていないことを示唆していると推定することができる。職場集団は規律性が高く、時として自分の意思に関わらず業務を押しつけられてしまう、自分の価値観を職場の価値観に合わせるように変えなくてはならない、といった上からの強制力が働く。この強制力が先輩との間に信頼関係を築いていく過程で障害となり、先輩との人間関係の不和の要因となっていると推定される。この問題の解決策を探る糸口としては、社会人になる前に他者とのコミュニケーションの方法を学び、社会性を獲得する機会をもっている集団である、大学生のサークル集団内で現代の青年が上からの強制感を抱いた時に、先輩への信頼感はどうに変化するのか、を明確にすることが考えられるが、サークル集団における人間関係を扱った心理学的研究は少ない。以上の事柄を踏まえ、本研究では、大学生のサークル集団(公認・非公認を問わず、クラブ、サークル、部活動と呼ばれる、スポーツや趣味の活動を目的とした集団)を対象として、現代の青年は上からの強制感を抱いた時に先輩への信頼感はどうに変化するのか検討を行う。

## 1-3 サークル集団の特徴、及び集団フォーマル性の定義

大学生のサークル集団の特徴としては、フォーマル集団とインフォーマル集団の双方の性質をもっていることが挙げられると新井(2004)は指摘している。フォーマル集団は以下のように定義されている。すなわち、集団の共通目標に基づいて作られる集団で、あらか

じめ明文化された階層的な地位構造に、没個人的に成員を配置することで形成され、明確な規則が存在し成員の行動が規制されており、それぞれの地位には職務・責任・役割が規定されている集団(広田 1963)である。一方でインフォーマル集団は、個人目的に基づいて作られる集団で、個人間の相互作用の反復によって自然発生的に生起し、個人の特性によって行動が期待され、比較的自由に行動することができる集団(広田 1963)である。

新井(2004)は、大学生のような集団は、趣味やスポーツを行うという成員の個人目的に基づいて活動が行われ、成員の行動は個人の特性によって期待され比較的自由であるという点でインフォーマル集団としての性質をもち、同時に、組織運営などの面では役割や規則などの存在によって成員の行動が規制されている側面もありフォーマル集団としての性質ももっている、と指摘している。

また、大学生のサークル集団は練習する日時が厳格に決まっている、部員の役割や規則が明確に決められている、というようなフォーマル集団としての性質を強くもっている集団もあれば、ゆるやかな役割分担をしているものの、活動の多くは部員の自由意思に基づいて行われているような、インフォーマル集団の性質を強くもっている集団もある。本研究では「集団フォーマル性」という概念を用いて、サークル集団のフォーマル集団としての性質の強さを捉える。集団フォーマル性は、あるサークル集団のフォーマル集団としての性質をもつほど高くなるものと定義する。

#### 1-4 サークル集団内における青年の対先輩行動に関する研究

サークル集団内における青年の対先輩行動に関する研究としては、新井(2004)の研究がある。この研究で新井は青年の対先輩行動を6つに類型化した。すなわち、集団内に限らず個人的にも好意的に関わる、親密な相互関係に見られる行動である「親交」、先輩に対して失礼のないようにしたり、譲ったりするなどの形式的なコミュニケーションを円滑にする「礼義」、先輩の気分を害さないように、先輩の意向に沿った、要求に応えるように労力の高い積極的な行動である「服従」、直接先輩に対してとる行動ではなく、別の他者との相互作用場面で先輩の行動を参考にしたり、内面化したりするという「参照」、意見が食い違った場面において先輩の意向に沿うように表面的な同調を示したり、自分の意見を主張しなかったりする消極的な行動である「衝突回避」、悪口や反抗など、先輩に対して直接または間接的な、先輩の意向に逆らうような行動である「攻撃」の6つである。

また新井(2004)は、集団フォーマル性が高いほど、上位者の権力が強調・正当化され、「服従」が多く生起する、と指摘し、集団フォーマル性を中心としてサークル集団内の対人関係の研究を行うことの必要性を示した。

## 第2章 本研究の仮説と分析、そして結果

### 2-1 仮説

新井(2004)は後輩がとる対先輩行動として、集団内に限らず個人的にも好意的に関わる、親密な相互関係に見られる行動として「親交」がある、と指摘した。この行動は山岸(1998)が示した信頼の定義、「相手が自分を裏切ろうと思えば裏切れる状況の中で、相手の人格や相手が自分にもっている感情について評価をし、相手は自分を裏切らないと期待すること」に合致していると考えられる。山岸は、信頼は大まかに、他者の信頼性(他者がどの程度信頼できる人格の持ち主であるか)のデフォルト値としての「一般的信頼」と、特定の相手についての情報に基づく「情報依存的信頼」に分けられていると指摘し、「情報依存的信頼」のもととなる情報には大きく分けて、「相手の一般的な人間性」「相手が自分に対してもっている感情や態度」「相手にとっての誘因構造」の3種類の情報が考えられる、と述べている。

相手の一般的な人間性にもとづく信頼とは、直接その相手との関わりの中で相手の人格の高潔さを実感したり、間接的に相手の評判を聞いたり、また相手の社会的カテゴリー(相手が医者であった場合。医師免許を取るには努力して勉強しなくてはならない、ということは、相手には忍耐強く勉強する力があると一般的に信頼できる)に基づく偏見やステレオタイプをもとにした相手への信頼、である。このような信頼を「人格的信頼」と山岸は名付けている。

次に、相手が自分に対してもっている感情や態度にもとづく信頼とは、相手は他者に対しては冷酷な人間であり人格も高潔とは言い難い場合であっても、自分にとっては優しい人物であり、信頼できる場合のことを指している。このような信頼を「人間関係的信頼」と山岸は名付けている。

最後に、相手にとっての誘因構造にもとづく信頼であるが、これは例えば相手が約束を破ったら殺される、という状況下に置かれた時には、その相手は約束を破ることはないだろう、と考えることができる。このような社会的不確実性のない状況での信頼であり、体系的には信頼というよりはむしろ「安心」である、と山岸は述べている。

サークル集団という枠からはずれて先輩と個人的に好意的な関係に関わろうとする「親交」は、集団の外という、ともすれば先輩に裏切られてしまうかもしれない状況の中で、先輩の人間性を評価しているからこそ後輩がとる行動であると考えることができる。故に本研究では新井が指摘した「親交」を「後輩が抱く先輩への信頼感」として捉える。また、先輩の素晴らしいプレーを目の当たりにして、先輩の技術の高さから先輩に好意を抱くという、特に体育会系のサークル集団に見られるこの後輩の行動は、先輩の人間性に基づく信頼とは言えないため、本研究ではこのような行動は後輩から先輩への信頼としない。

また、新井が指摘した「服従」は、自分の意思に関わらず上からの要求に応えなければならない、という点から「後輩が抱く先輩からの強制感」と捉えることができるため、本研究ではこのように捉える。

以上を踏まえて本研究では以下の3つの仮説を設定する。

仮説①:集団フォーマル性の高いサークル集団に所属している成員の、先輩への信頼感と

先輩からの強制感は影響し合っていない、である。この仮説は新井(2004)が、集団フォーマル性の高いサークル集団では上位者の権力が強調・正当化されると指摘したことを踏まえて、上位者の権力が強調・正当化されているのにも関わらず、なおも集団フォーマル性の高いサークル集団に所属しているということは、その強調・正当化された権力を妥当であると捉えているからであると推定することができ、妥当であると捉えているならば先輩からの強制を先輩への信頼に影響させることはない、と推定することができるからである。

仮説②:集団フォーマル性の低いサークル集団に所属している成員の、先輩への信頼感と先輩からの強制感は負の相関関係にある、である。この仮説は、集団フォーマル性の低いサークル集団はインフォーマル集団としての性質を強くもっている、と考えることが出来る。そしてインフォーマル集団とは、成員の自由意思に基づく行動が尊重される集団であるため、自分の自由意思を無視し、先輩の要求に応えることを求めるような行動は敬遠されると推定されるからである。

仮説③:中学・高校・大学と集団フォーマル性の高いサークル集団に所属してきた人ほど、先輩への信頼感と先輩からの強制感は影響し合っていない、である。この仮説は、多感な青年期の多くの時間を上位者の権力が強調・正当化される集団で過ごしてきた人というのは、より集団フォーマル性の高い集団へ適応することができると推定することができるからである。

## 2-2 分析、そして結果

本研究の分析は国立小樽商科大学の学生 128 名を対象とし、2013 年 11 月 19 日に授業時間の一部を利用し質問紙を用いて集合調査方式で実施し、統計解析ソフトである SPSS を用いて分析を行った。

集団フォーマル性については、新井(2004)が作成した集団フォーマル性尺度 10 項目を利用し、先輩からの強制感については新井(2004)の研究で用いられた質問紙の「服従」に関する項目を加筆・修正し 12 項目を用意、先輩への信頼感については新井の研究で用いられた質問紙の「親交」に関する項目を加筆・修正し 12 項目を用意した。また、中学・高校・大学でのサークル集団への加入の有無と、これらのサークル集団の規律性を調査する項目を 15 項目用意した。

集団フォーマル性尺度については「非常にそう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の 5 件法・単一回答、先輩からの強制感については「そうするべきだと思う」「ややそうするべきだと思う」「どちらともいえない」「あまりそうすべきだと思わない」「そうするべきだと思わない」の 5 件法・単一回答、先輩への信頼感については「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法・単一回答で回答を求めた。中学・高校・大学でのサークル集団への加入の有無と、これらのサークル集団の規律性を調査する項目においても単一回答で回答を求めた。

仮説①についての分析では、まず集団フォーマル性の平均値を求めた。記述統計を用いて平均値を求めたところ 29.88 であったため、「29.88 以上を集団フォーマル性高群」「29.88 未満を集団フォーマル性低群」として分類した。仮説①は集団フォーマル性高群を対象と



しているため、以後の検定は集団フォーマル性高群の回答者のみを対象として行った。次に先輩からの強制感及び先輩への信頼感の合計値を算出し、独立変数に先輩からの強制感、従属変数に先輩への信頼感を設定し、t検定を用いて検定を行った(表1)。

表 1

独立サンプルの検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
信頼感の合計 2	14.114	.000	-572	65	.569	-.89750	1.56860	-4.03021	2.23520
等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。			-.567	44.914	.574	-.89750	1.58400	-4.08801	2.29301

検定の結果、有意確率は.574( $p<.574$ )、5%水準で有意とならなかったため、「先輩からの強制感の合計値」が変化した時「先輩への信頼感の平均値」は変化しないことが判った。

また、「集団フォーマル性の合計値」と「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の相関関係を検討したところ、「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の間に相関関係は見られなかった(表2)。

表 2

相関係数

		集団フォーマル性合計	信頼感の合計 2	強制感の合計 2
集団フォーマル性合計	Pearson の相関係数	1	.157	.214
	有意確率 (両側)		.205	.082
	N	67	67	67
信頼感の合計 2	Pearson の相関係数	.157	1	.006
	有意確率 (両側)	.205		.960
	N	67	67	67
強制感の合計 2	Pearson の相関係数	.214	.006	1
	有意確率 (両側)	.082	.960	
	N	67	67	67

以上の検定から、仮説①は成り立つことが判った。

次に仮説②の分析では、集団フォーマル性低群の回答者のみを対象に検定を行った。独立変数に先輩からの強制感、従属変数に先輩への信頼感を設定し、t検定を用いて検定を行った(表3)。

表 3

独立サンプルの検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
信頼感の合計 2	.589	.447	-1.692	47	.097	-3.35714	1.98417	-7.34878	.63449
等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。			-1.742	46.596	.088	-3.35714	1.92767	-7.23600	.52172

検定の結果、有意確率は.097(p<.097)、5%水準で有意とならなかったため、「先輩からの強制感の合計値」が変化した時「先輩への信頼感の平均値」は変化しないことが判った。

また、「集団フォーマル性の合計値」と「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の相関関係を検討したところ、「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の間に弱い相関関係(r=.292 p<.042)が見られた(表 4)。

表 4

相関係数

		集団フォーマル性合計	信頼感の合計 2	強制感の合計 2
集団フォーマル性合計	Pearson の相関係数	1	.085	.153
	有意確率 (両側)		.560	.289
	N	50	49	50
信頼感の合計 2	Pearson の相関係数	.085	1	.292*
	有意確率 (両側)	.560		.042
	N	49	49	49
強制感の合計 2	Pearson の相関係数	.153	.292*	1
	有意確率 (両側)	.289	.042	
	N	50	49	50

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

以上の検定から集団フォーマル性低群では、先輩からの強制感と先輩への信頼感に正の相関関係にあることが判ったため、仮説は成り立たなかった。

最後に仮説③の分析では、中学・高校・大学で所属しているサークル集団の規律性を「過去集団フォーマル性」とした。記述統計を用いて過去集団フォーマル性の平均値を算出したところ、平均値は 12.85 であったため「12.85 以上を過去集団フォーマル性高群」「12.85 未満を過去集団フォーマル性低群」として検定を行った。まず始めに、過去集団フォーマル性高群の回答者のみを対象とし、独立変数に先輩からの強制感、従属変数に先輩への信頼感を設定し t 検定を行った(表 5)。

表 5

独立サンプルの検定

	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
								下限	上限
信頼感の合計 2 等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	11.081	.002	-1.658 -1.755	35 26.878	.106 .091	-3.08235 -3.08235	1.85856 1.75621	-6.85544 -6.68656	.69073 .52185

検定の結果、有意確率は.091(p<.091)、5%水準で有意とならなかったため、過去集団フォーマル性高群では「先輩からの強制感の合計値」が変化した時「先輩への信頼感の平均値」は変化しないことが判った。次に「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の相関関係を検討したところ、相関関係は見られなかった(表 6)。

表 6

## 相関係数

		信頼感の合計 2	強制感の合計 2	集団フォー マル性合計
信頼感の合計 2	Pearson の相関係数	1	.172	.064
	有意確率 (両側)		.308	.705
	N	37	37	37
強制感の合計 2	Pearson の相関係数	.172	1	.171
	有意確率 (両側)	.308		.313
	N	37	37	37
集団フォー マル性合計	Pearson の相関係数	.064	.171	1
	有意確率 (両側)	.705	.313	
	N	37	37	37

最後に過去集団フォーマル性低群の回答者のみを対象として、独立変数に先輩からの強制感、従属変数に先輩への信頼感を設定し t 検定を行った(表 7)。

表 7

## 独立サンプルの検定

	等分散性のための Levene の検定	2 つの母平均の差の検定								
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
信頼感の合計 2	等分散を仮定する。 等分散を仮定しない。	3.844	.057	-1.769	37	.085	-4.21390	2.38205	-9.04039	.61258
				-1.874	35.663	.069	-4.21390	2.24895	-8.77647	.34867

検定の結果、有意確率は.085( $p<.085$ )、5%水準で有意でなかったため、過去集団フォーマル性低群では「先輩からの強制感の合計値」が変化した時「先輩への信頼感の平均値」は変化しないことが判った。また、「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の相関関係を検討したところ、「先輩からの強制感の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の間に弱い正の相関関係が見られた( $r=.395$   $p<.013$ )。さらに「集団フォーマル性の合計値」と「先輩への信頼感の合計値」の間に、一定の正の相関関係が見られた( $r=.483$   $p<.002$ )(表 8)。

以上の分析をもとに、次の章で考察を行う。

表 8

## 相関係数

		信頼感の合計 2	強制感の合計 2	集団フォー マル性合計
信頼感の合計 2	Pearson の相関係数	1	.395*	.483**
	有意確率 (両側)		.013	.002
	N	39	39	39
強制感の合計 2	Pearson の相関係数	.395*	1	.385*
	有意確率 (両側)	.013		.015
	N	39	39	39
集団フォー マル性合計	Pearson の相関係数	.483**	.385*	1
	有意確率 (両側)	.002	.015	
	N	39	39	39

\*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\* . 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

## 第3章 考察

### 3-1 考察

第2章の分析では仮説①は成立したことにより、集団フォーマル性の高いサークル集団に所属している成員の「先輩からの強制感」は「先輩への信頼感」に影響し合っていないことが判った。仮説②については集団フォーマル性の低いサークル集団に所属している成員の「先輩からの強制感」と「先輩への信頼感」は正の相関関係にあることが判ったため、成立しなかった。この結果が意味するのは強制感が高まれば信頼感も高まる、ということであるが、そのような状況は一般的に考えにくい。集団フォーマル性の低いサークル集団というのは、多くの場合、後輩と先輩との関係が希薄である。そのため「個人的に先輩と好意的な人間関係をもっている」ということが重要な第3の変数となって擬似的な相関関係となっているのではないかと推定することができる。仮説③については、t検定を用いた検定では有意確率は.091、相関関係も見られなかったものの、「先輩からの強制感」と「先輩への信頼感」をより影響させ合っていないかどうかについては、さらなる分析が必要である。

また、過去集団フォーマル性低群の「先輩からの強制感」と「先輩への信頼感」の相関係数が.395、集団フォーマル性低群内での「先輩からの強制感」と「先輩への信頼感」の相関係数が.292となっていることから、過去集団フォーマル性低群の方が両者を強く正の相関関係として結び付けていることが判った。この結果は中学・高校・大学と集団フォーマル性の低いサークル集団に所属している人の方が、第3の変数である「個人的に先輩と好意的な人間関係をもっている」の影響を強く受けている可能性を示唆している。

さらに、過去集団フォーマル性低群では、集団フォーマル性と先輩への信頼感との間に正の相関関係が見られた。この結果は、中学・高校・大学と集団フォーマル性の低い、規律性の低いサークル集団に所属してきた人は、規律性が高い方が先輩のことを信頼できる、ということの意味している。おそらく、上下関係が明確なサークル集団で、達成すべき共有している目標にむかって後輩をまとめている先輩像というのは、これまで規律性の低いサークル集団に所属していた人にとっては頼もしく思えるのだろう。

### 3-2 まとめ

本研究を通じて、大学のサークル集団における青年の先輩からの強制感と先輩への信頼感の関係を明らかにすることに若干の寄与ができた。今後の研究の展望としては、職場集団における青年の強制感と信頼感の関係についての検討がなされるべきであると考えられる。職場集団は経済活動を主とした目的としている点で、サークル集団とは性質を大いに異にしているため、本研究結果と併せて検討することによって有益な調査結果が得られると推定される。

また、大学新卒者の離職率の問題の要因としては、本研究でなされたサークル集団内の対先輩行動というアプローチの他に以下のアプローチの方法があると考えられる。すなわち、大学生にとって大学は「レジャーランド」と化していると言われて久しく、大学生にとって大学は勉強をするところではなく、遊ぶところと認知される傾向にある、と宮下(1995)は指摘している。そのような認知の下でサークル集団は、書物を読み勉強をするよ

うな地道な集団よりも、明るく元気に遊ぶような集団が学生達に好まれると推定できる。このようなサークル集団の捉え方の変化に伴い、社会性の獲得といった本来サークル集団がもっている機能はあまり期待できなくなっている可能性がある。これらの事柄は、サークル集団の機能不全が、大学新卒者が入社後、先輩との間に信頼関係を築けないでいる要因となっている可能性を示唆している。

引用・参考文献表

- ・山岸俊男著 1998年 『信頼の構造』 東京大学出版 P31-P55
- ・広田君美著 1963年 『集団の心理学』 誠信書房
- ・松井豊著 斎藤誠一編 1996年 『青年期の人間関係』 培風館 P19-P54
- ・松井豊著 斎藤耕二・菊池章夫編 1990年 『社会化の心理学ハンドブック』 川島書店 P283-P296
- ・宮下一博著 落合良行・楠見考編 1995年 『講座生涯発達心理学 4』 金子書房 P155-P184
- ・新井洋輔著 2004年 『サークル集団における対先輩行動:集団フォーマル性の概念を中心に』 社会心理学研究 第20巻第1号
- ・高田治樹・松井豊著 2003年 『大学生のサークル集団に関する研究動向 新井・松井(2003)からの研究動向の変化』 筑波大学心理学研究 第43号
- ・独立行政法人 労働政策研究・研修機構 HP 調査シリーズ No.36  
(<http://www.jil.go.jp/institute/research/2007/036.htm>)

## 大学生の学園生活に関する調査

企業法学科 杉山ゼミ1年 長崎海介

こちらの質問紙の回答は卒業論文制作のみに使用し、その他の目的には一切使用しません。また、使用後は破棄致します。

学籍番号( ) 年齢( ) 性別(男・女)  
(はい、いいえ)

1: あなたは中学生の時、部活動に所属していましたか?  
(はい、いいえ)

2: 1で「はい」と回答した方のみ回答してください。中学生の時、所属していた部活動は体育会系でしたか?  
(体育会系・文化系)

3: 中学生の時、所属していた部活動の活動はどれくらいの頻度で行われていましたか?  
(毎日・1週間に1日・1週間に2日・4日・1週間に1日・2週間に1日・それ以下)

4: 中学生の時、所属していた部活動の顧問は積極的に部活動に参加していましたか?  
(していた・していません)

5: 中学生の時、所属していた部活動には「〇〇大会で優勝する」といった明確な目標がありましたか?  
(あった・なかった)

6: あなたは高校生の時に部活動に所属していましたか?  
(はい、いいえ)

7: 6で「はい」と回答した方のみ回答してください。高校生の時、所属していた部活動は体育会系でしたか?  
それとも文化系でしたか?  
(体育会系・文化系)

8: 高校生の時、所属していた部活動の活動はどれくらいの頻度で行われていましたか?  
(毎日・1週間に1日・1週間に2日・4日・1週間に1日・2週間に1日・それ以下)

9: 高校生の時、所属していた部活動の顧問は積極的に部活動に参加していましたか?  
(していた・していません)

10: 高校生の時、所属していた部活動には「〇〇大会で優勝する」といった明確な目標がありましたか?  
(あった・なかった)

11: あなたは小樽商科大学で、もしくは他の大学で部活動・サークルに所属していますか?  
(はい、いいえ)

12: 11で「はい」と回答した方のみ、以下の質問に〇を付けて回答して下さい。またこれ以降、部活動・サークルを「団体」と記します。

①: あなたはいくつの団体に所属していますか?  
(1つ・2つ・3つ・4つ以上)

②: あなたが所属している団体のうち、最も積極的に参加している団体は何ですか? 団体を記述してください。  
( )

③: あなたは②の団体に、どの位の期間所属していますか?  
(半年~1年・1年~2年・2年~3年・3年~4年・それ以上)

④: ②の団体はどのくらいの頻度で活動していますか?  
(毎日・1週間に1日~6日・1週間に2日~4日・1週間に1日・2週間に1日・それ以下)

7: 次の項目には、各項目に対して「非常にそう思う」のであれば○、「全くそう思わない」のであれば1に○、というように自分の考えに最も近い数字1つに○をつけてください。

また、複数の団体に所属している方は、最も積極的に参加している団体を思い浮かべて回答してください。

	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全く思わない
私が所属する団体には、組織としての明確な目的がある。	5	4	3	2	1
私が所属する団体のメンバー全員に、それぞれの役割が決まっている。	5	4	3	2	1
私がその団体に入った時、私の役割は始めから決まっていた。	5	4	3	2	1
私が所属する団体には明確な上下関係がある。	5	4	3	2	1
私が所属する団体の規則は、明文化されている。	5	4	3	2	1
私が所属する団体のメンバーには、決められた仕事をすることが義務づけられている。	5	4	3	2	1
私が所属する団体では、どの仕事も誰かの責任であることが明確である。	5	4	3	2	1
私が所属する団体のメンバーはそれぞれ、組織の目標を達成しようとしている。	5	4	3	2	1
私が所属する団体では、自由に辞めたり加入したりすることができない。	5	4	3	2	1
私が所属する団体には、はっきりとした命令系統がある。	5	4	3	2	1

8: 次の項目には、各項目に対して「そう思うべきだと思う」のであれば○、「そう思うべきだと思わない」のであれば1に○、というように自分の考えに最も近い数字1つに○をつけてください。

また回答の際には、なるべく特定の先輩を思い浮かべず、自分の中の一般的な先輩のイメージを思い浮かべながら回答してください。

	そう思うべきだと思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全く思わない
先輩の使い回りをする。	5	4	3	2	1
先輩の荷物を待つ。	5	4	3	2	1
先輩の仕事を代わりにやる。	5	4	3	2	1
先輩に誘われたら断らない。	5	4	3	2	1
先輩の言ったことを参考にしない。	5	4	3	2	1
飲み会の場で、先輩のお酒が無くならぬ法。	5	4	3	2	1
先輩の機嫌を損なわないように気を使う。	5	4	3	2	1
先輩といえる時には仕事を率先してやる。	5	4	3	2	1
先輩の意見には同調する。	5	4	3	2	1
先輩には自分の意見を言うべき。	5	4	3	2	1
美談の内容は先輩に合わせる。	5	4	3	2	1
先輩が言った冗談は、面白くなくても笑う。	5	4	3	2	1



差別を許容する関心表示型留學の比率大

あなたは過去、どのような場面で「先輩に能わなくてはいけぬ」と感じましたか？以下の空欄に自由に記述してください。

9. 次の項目には、各項目に対して「あてはまる」のであれば○、「あてはまらない」のであれば1に○、と  
いうように、自分の考えに最も近い数字1つに○をつけてください。

また回答の際には、なるべく特定の先輩を思い浮かべず、自分の中の一般的な先輩のイメージを思い浮かべな  
から回答してください。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない
先輩に個人的な相談のつてもらう。	5	4	3	2
先輩と個人的に遊びに行ったりする。	5	4	3	2
先輩と精神的に関わる。	5	4	3	2
先輩とは普段から親しくしている。	5	4	3	2
先輩と一緒にいると落ち着く。	5	4	3	2
先輩とプライベートでは付き合わない。	5	4	3	2
先輩に頼みごとをすることが多い。	5	4	3	2
先輩は自分を要切ったりしないと思う。	5	4	3	2
先輩に好意を伝えている。	5	4	3	2
先輩を尊敬、もしくは敬み念によく誘う。	5	4	3	2
先輩とは個人的な話をする。	5	4	3	2
先輩とはある程度距離を置くようにしている。	5	4	3	2

あなたは過去、どのような場面で「先輩を信頼できる」と感じましたか？以下の空欄に自由に記述してくださ  
い。

質問は以上になります。回答ありがとうございます。

